



⑤ 自粛中生まれた茶室

「ずっと茶室に入るとに慣れていたんです」。着物の車いすの女性が目を輝かせた。

古民家の中野家住宅（長岡京市調子1丁目）の一室で大山崎に工房を持つ竹垣職人の真下彰宏さん（43）＝亀岡市＝が竹の2畳の茶室を組み立てていく。京銘竹など10本の竹を使い10分ほどで出来上がる。女性の車いすが柱にぶつかることなく、ゆったりと中に入った。もう一人の女性が盆に乗せた茶碗や茶筌を机に置きお点前が始まる。

女性たちは「車いすおもてなし隊」の加藤千明さん（31）と、メンバーに茶道を教える真千家助教授の田中賀鶴代さん（60）。京都を拠点に、テーブルで行う「盆路点前」で障書のあるなしに関わらず、多くの人に茶文化を広め、誰もが生きづらさを感じない社会を目指し活動している。田中さんは「車いす利用者にとって茶室は遠い存在だったから」と感慨深い様子で見守った。

昨年9月、真下さんは茶室を考案した。新型コ

車いす女性「憧れの空間」

コロナウイルスの影響で営業自粛中の、京都の錦市場内にあるアンテナショップで開かれた伝統文化を発信する展示会のためだった。「店の一角にある茶室を見た人が驚いたり、楽しんでくれたら」と場所を選ばず組み立てられるようにした。四角い京銘竹を使い、布や掛け軸で和の空間を演出する。

別の日、中野家住宅で真下さんが手掛けた竹垣の完成お披露目会が開かれ、加藤さんと田中さんが茶席を設けることになり、茶室を設置した。二人は喜び合い、その姿を見た真下さんは「彼女たちが何でそんなに喜んでくれているのか分からなかった」と振り返った。

「車いすでは入れないと諦めかけていた茶室が、私の周りに出来上がっていく……心の底から感動しました」と加藤さんは笑顔で話した。三重の茶葉が盛んな地域で生まれ育ち、祖母の白いきれいな抹茶碗を眺め「いつかこれでお点前したい」と夢を描いた。5歳で脊椎髄疾患が見つかり、

車いすの生活になったとき一度は諦めたが、約3年前に田中さんに出会い、茶道への道が開けた。

茶道を志す者として茶室は憧れの場所。だが茶室には飛び石や段差があり、車いすでも入れ難い。車いすでも入れられる茶室を作りたいと、京都の大学に社会人入学し、通信教育で建築デザインを勉強している。思いを抱きつつも、単位の取得は簡単ではなく諦めかけていたときだった。

「本や資料で思い描くことしかできなかった空間を肌で感じる事ができた」と語る笑顔には喜びがあふれていた。

田中さんは「盆路点前」や着脱が容易な「パリアフリー着物」を提案したりしながら活動してきた。「茶室は私の力ではどうしてもクリアできなかったから」と顔をほころばせた。

コロナ禍で生まれた出会いは、加藤さんや田中さんの夢を広げた。「自然の中でお点前もできるし、やりたいことが広がるね」とほほ笑む。二人を見つめ、真下さんは「必要としている人の切実な声にはっとした。彼女の笑顔が職人としてのやりがいを感じさせてくれた」と目を細めた。

（鷹掛朱里）

京銘竹の組み立て式茶室で、お点前をする加藤さん（右）と田中さん＝長岡京市調子1丁目・中野家住宅

▶ 京都新聞HPに動画